

日蓮大聖人御書全集

かえんじょうごうしよ

可延定業書

新版
1307
S
1309

かえんじょうごうしよ
可延定業書

ぶんえい ねん
文永12年(75)
さい と きあま
54歳 富木尼

そ やまい ふた
夫れ、病に二つあり。一には軽病、二には重病。

じゅうびよう ぜんい あ すみ たいじ いのち そんな
重病すら、善医に値つて急やかに対治すれば、命なお存

きようびよう ごう ふた いち じょうごう
す。いかにいわんや軽病をや。業に二つあり。一には定業、

に ふじょうごう じょうごう よ よ ざんげ かなら
二には不定業。定業すら、能く能く懺悔すれば、必ず

しょうめつ ふじょうごう
消滅す。いかにいわんや不定業をや。

ほけきょうだいしち い きよう すなわ えんぶだい ひと
法華経第七に云わく「この経は則ちこれ閻浮提の人の

やまい ろうやく とうんぬん きようもん ほけきょう もん いちだい
病の良薬なり」等云々。この経文は法華経の文なり。一代

しょうぎよう

みな

によらい

きんげん

むりようこう

このかた

ふもうご

ことば

の聖教は皆、如来の金言、無量劫より已来、不妄語の言

ほけきよう

ほとけ

しょうじき

ほうべん す

なり。なかんずく、この法華経は、仏の「正直に方便を捨

もう

しんじつ

なか

しんじつ

たほう

しょうみよう

くわ

つ」と申して、真実が中の真実なり。多宝は証明を加え、

しょうぶつ

ぜつそう

そ

たも

虚

うえ

諸仏は舌相を添え給う。いかでかむなしかるべき。その上、

さいだいいち

ひじ

きようもん

のち

ごひやくさい

最第一の秘事はんべり。この経文は「後の五百歳、

にせんごひやくよねん

とき

によにん

やまい

説

そうろうもん

二千五百余年の時、女人の病あらん」ととかれて候文な

り。

あじやせおう

おんとしごじゆう

にがつじゆうごにち

だいたくそう

み

しゅつたい

阿闍世王は御年五十の二月十五日に、大悪瘡、身に出来

だいい ぎば

ちから

およ

さんがつなのか

かなら

し

むけん

せり。大医・耆婆が力も及ばず、三月七日、必ず死して無間

だいじよう お

ごじゆうよねん

あいだ

だいらくいちじ

めつ

大城に墮つべかりき。五十余年が間の大楽一時に滅して、

いっしょう

だいく

さんしちにち

集

じようごうかぎ

一生の大苦、三七日にあつまれり。定業限りありしかど

ほとけ

ほけきよう

重

えんぜつ

ねはんぎよう

名

だいおう

も、仏、法華経をかさねて演説して、涅槃経となづけて大王

与

たま

み

やまい

へいゆ

こころ

にあたえ給いしかば、身の病、たちまちに平愈し、心の

じゆうざい

いちじ

つゆ き

ほとけ

めつごいっせんごひやくよねん

ちんしん

重罪も一時に露と消えにき。仏の滅後一千五百余年、陳鍼

もう ひと

いのち

ちめい

もう

ごじゆうねん

さだ

と申す人ありき。命は知命にありと申して、五十年に定ま

そうら

てんだいだいし

あ

じゆうごねん

いのち

の

つて候いしが、天台大師に値つて十五年の命を延べて

ろくじゆう

うえ

ふきようぼさつ

じゆみよう

六十五までおわしき。その上、不軽菩薩は、「さらに寿命を

ま

説

ほけきよう

ぎよう

じようごう

延

たま

かれ

増す」ととかれて、法華経を行じて定業をのべ給いき。彼

みな なんし

によにん

ほけきよう

ぎよう

らは皆、男子なり。女人にはあらざれども、法華経を行じ

いのち

延

ちんしん

のち

ごひやくさい

当

て寿をのぶ。また、陳鍼は「後の五百歳」にもあたららず。

ふゆ

とうまい

なつ

きつか

とうじ

によにん

ほけきよう

ぎよう

冬の稲米、夏の菊花のごとし。当時の女人の法華経を行じ

じようごう

てん

あき

とうまい

ふゆ

きつか

たれ

て定業を転ずることは、秋の稲米、冬の菊花、誰かおどろ

くべき。

にちれん

はは

そうら

げんしん

やまい

されば、日蓮、悲母をいのりて候いしかば、現身に病を

癒

しかねん

じゆみよう

延

いま

によにん

いやすのみならず、四箇年の寿命をのべたり。今、女人の

おんみ

やまい

み

たも

こころ

ほけきよう

しんじん

御身として病を身にうけさせ給う。心みに法華経の信心

た

ご 覧

を立てて御らんあるべし。

ぜんい
なかつかさのさぶろうぎえもん_のじようどの
ほけきよう
ぎようじゃ
しかも善医あり。中務三郎左衛門尉殿は法華経の行者

なり。

いのち もう もの いっしんだいいち ちんぼう いちにち

命と申す物は一身第一の珍宝なり。一日なりともこれを

延 せんまんりよう ことがね 過 ほけきよう いちだい

のぶるならば、千万両の金にもすぎたり。法華経の一代の

しようぎよう ちようか もう じゆりようほん 故

聖教に超過していみじきと申すは、寿量品のゆえぞかし。

えんぶだいいち たいし たんめい くさ 軽 にちりん

閻浮第一の太子なれども、短命なれば草よりもかるし。日輪

ちしや わかじに い いぬ おと はや

のごとくなる智者なれども、天死あれば生ける犬に劣る。早

こころ たから ごたいじ

く心ざしの財をかさねて、いそぎいそぎ御対治あるべし。

もう ひと もう よ

これよりも申すべけれども、人は申すによつて吉きこと

もあり、また、我が志のうすきかとおもう者もあり。人

こころ知

うえ

さきさき

しようしよう

そうろう

ひと

の心しりがたき上、先々に少々かかること候。この人

ひと

もう

少

こころ得

気

おも

ひと

もう

は、人の申せばすこそ心えずげに思う人なり。なかなか申

悪

仲人

平情

すはあしかりぬべし。ただ、なこうどもなく、ひらなさけ

こころ

打

頼

たま

こそ

じゅうがつ

に、また、心もなくうちたのませ給え。去年の十月、こ

きた

そうら

ごしよろう

歎

もう

れに来て候いしが、御所労のことをよくよくなげき申せ

とうじ

だいじ

驚

たま

しなり。「当時、大事のなければ、おどろかせ給わぬにや。

みようねんしろうがつにがつ

頃

かなら

起

もう

明年正月二月のころおいは必ずおこるべし」と申せしか

歎

い

そうろう

ときどの

あま御前

ば、これにもなげき入って候。「富木殿もこの尼ごぜんを

つえはしら

たの

もう

そうら

こそ、杖柱とも恃みたるに」なんど申して候いしなり。

ずいぶん

侘

そうら

負

魂

ひと

随分におび候いしぞ。きわめてまけじだましいの人にて、

わ

方

だいじ

もう

ひと

我がかたのことをば大事と申す人なり。

み

たから

惜

たま

やまいい

かえすがえす、身の財をだにおしませ給わば、この病治

えがたかるべし。

いちにち

いのち

さんぜんかい

たから

過

そうらう

一日の命は三千界の財にもすぎて候なり。まず

おんこころざし

見見

たも

ほけきよう

だいしち

まき

さんぜん

御志をみみえさせ給うべし。法華經の第七の卷に「三千

だいせんせかい

たから

くよう

て

いっし

や

ほとけ

大千世界の財を供養するよりも、手の一指を焼いて仏・

ほけきよう

くよう

説

そうらう

法華經に供養せよ」ととかれて候は、これなり。

いのち さんぜん

過

そうろう

よわい

長

命は三千にもすぎて候。しかも齡もいまだたけさせ

たま

ほけきよう

遇

たま

いちにち

生

給わず。しかも法華經にあわせ給いぬ。一日もいきておわ

くどく積

惜

いのち

いのち

せば功德つもるべし。あらおしの命や、あらおしの命や。

ごせいめい

おんとし

われ

書

たま

遣

御姓名ならびに御年を我とかかせ給いて、わざとつかわ

だいにちがつてん

もう

上

伊予

殿

歎

せ。大日月天に申しあぐべし。いよどのもあながちになげき

そうら

にちがつてん

じがげ

当

そうら

きようきよう

候えば、日月天に自我偈をあて候わんずるなり。恐々

きんげん

謹言。

にちれん

かおう

日蓮

花押

あま 御

前 ごへんじ

尼ごぜん御返事